特集

淘汰（とうた）される時代が間もなくやってきます

園が生き残っていくためには

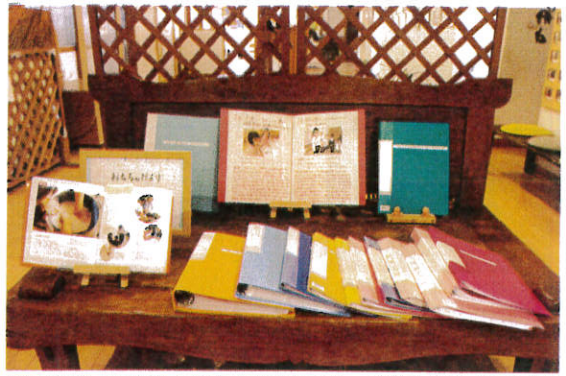
年々少子化が進む中、ずっと足りないといわれてきた保育園も、いずれは淘汰（とうた）される時代がやってくることが予想されます。これからの時代、園が生き残っていくために、私たちは何をすべきでしょうか。今回は二つの幼保連携型認定こども園の事例をもとに、一緒に考えてみたいと思います。

CASE 1

埼玉県久喜市・学校法人柿沼学園　認定こども園こどもむら　栗橋さくら幼稚園の場合

街に子どもが居続けるようにしなければ

取材日…2022年1月6日



「園だより」や「クラスだより」のほかに、栄養士が作成した「食育のしおり」、各クラスごとに作成する「おもちゃだより」などを毎月発行。それらすべてをファイリングして、園の入り口付近に置き、保護者がいつでも閲覧できるようにしている。

この日は年が明けて間もなかったので、学年ごとに一つの部屋に集まって過ごす。合同になったことでいつもよりも部屋の人数が多く、にぎやかでちょっと特別な日。

全クラスにロフトがあり、支援が必要な子のリソースルームとして使ったり、次の日も続けて遊べるようにブロックやおままごとの置き場にしたり、使い方は担任に任せて、さまざまに活用している。

「おもちゃだより」では、クラスにあるおもちゃで子どもたちがどのように遊んでいるかを、具体的な姿を交えて紹介。クリスマス時期には、「サンタさんのプレゼントはここから選びました」という保護者も。

言葉だけでは伝わりにくい教育課程を、毎月一つ、写真とエピソードで紹介。おたよりの閲覧スペースに一緒に掲示して、保育を可視化する機会をきめ細かに設けている。

倉橋の本を読んで方向転換をすることに

埼玉県久喜市は、東京都心から約50㎞の埼玉県東部に位置する、いわゆる東京のベッドタウン。この地に、1975年「栗橋さくら幼稚園」は開園しました。団塊ジュニア※世代の受け皿として、開園2年目には園児数は定員200名にまで拡大しました。

ところが、開園から約25年後、現理事長の柿沼平太郎さんが園の運営に携わるようになったころには、園児数は半分の100名程度にまで落ち込んでいました。

園児数を増やさなければと、地域のほかの園ではやっていて、保護者からの要望も高かった、外部講師を招いての英語指導や読み書き教室など、いわゆる早期教育的なメニューを保育の中に取り入れました。

その結果、園児数はそれなりに回復したものの、「3～4年やってみて、何か違うな」と、柿沼さんは感じました。これまで保育についてはまったくの門外漢だった柿沼さんが、そのときたまたま手にしたのが倉橋惣三の著書でした。

「何がいいのかわからなくて、とりあえず一番難しそうな本を選んでみたんです。読んでみたら、書いてあることが自分の園とあまりにも違っていました」（柿沼さん）

そこから、それまでの保育者主導のやり方から、子どもの主体性を大事にした遊び中心の保育へと大きく方向転換をすることにしました。

保護者に理解してもらうために、保育の可視化を徹底的に

「最初は園の理念を見直すことから始めました。でもまずは、私たちが新しい保育を理解することが必要でした。どうして遊び中心の保育がいいのか。具体的にどんな保育をしていくのか。

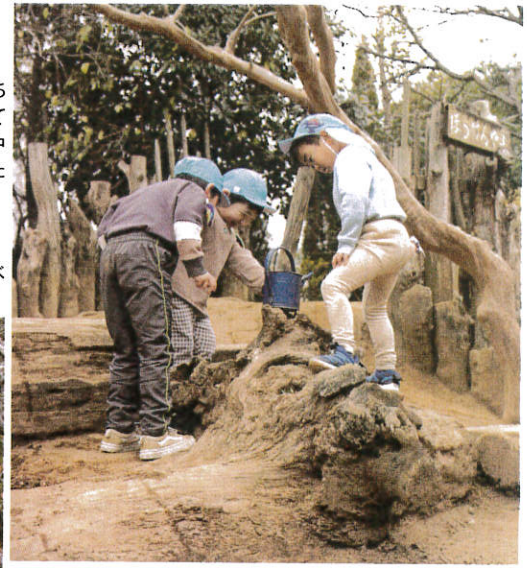
土曜日など園が休みの日にも集まって、みんなで最初から全部つくり直そうという感じだったので、本当に大変でした」と、現園長の塚越優子さん（当時は非常勤職員）は振り返ります。

同時に、保育を変えていくことを、保護者に理解してもらわなければなりません。

「そこは、すごくバランスが難しいですね。保護者の思う良い園と、保育界が思う良い園というのは違うんです。園のイメージは自分の記憶や経験でつくられるから、いくら良い保育をしたとしても、保護者にそれを評価してもらうのは、なかなか難しいところがあります」（柿沼さん）

まずは、子どもたちが生き生きと遊んでいる様子を具体的に見せて、保護者自身の目で理解してもらうことを丁

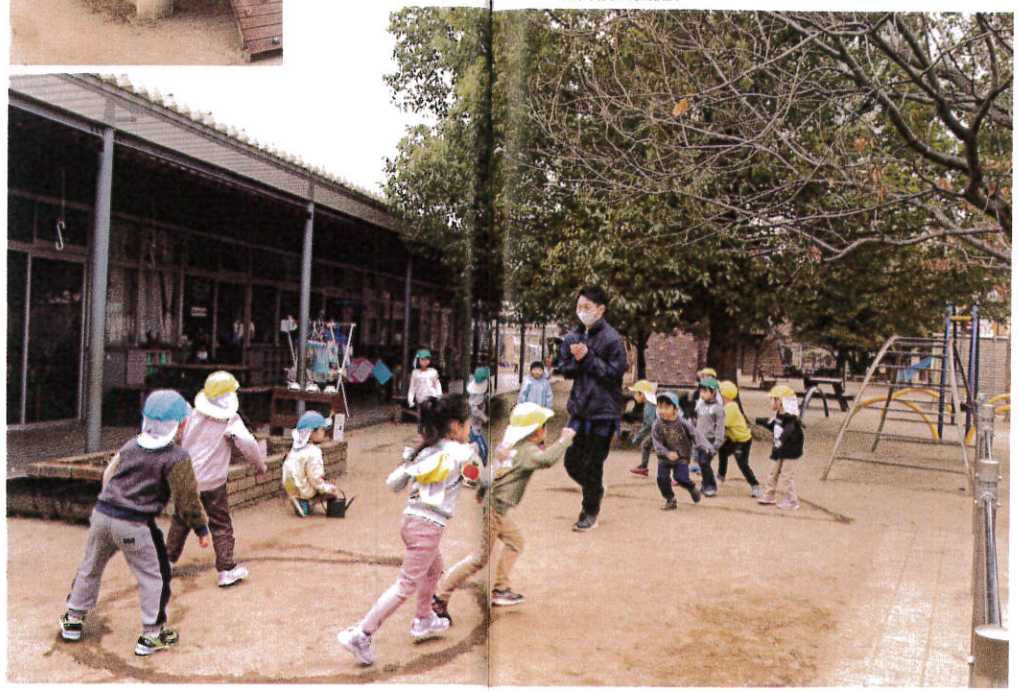
※団塊ジュニア世代…出生数の多かった1971～1975年に生まれた世代のことで、第二次ベビーブーム世代とも呼ばれる。



→園庭には、子どもが登るのにちょうどいい木を植えたり、あえて起伏をつくったりして、遊びの中で体力をつけたり、体幹を鍛えたりできるようにしている。

園庭には大きなツリーハウスがあり、子どもたちに人気のスペース。

↓木が多く植えてあり、夏場も日陰の中で涼しく遊べる自慢の園庭。



園内には造形の部屋があり、週3回造形の先生が来て、子どもたちと一緒に何か作ったり、発表会の大道具作りのときには子どもの相談にのってくれたりしている。

寧に積み重ねていきました。たとえば懇談会で、子どもたちの育ちの様子を動画で見てもらうという工夫は、現在も続けて行っていることの一つです。

そのほかにも、毎月発行しているおたよりや、教育課程を写真とエピソードで紹介した記録、保育者のコメントを写真に添えた年度ごとの個別のアルバムなど、さまざまに保育の中身を可視化して伝えるということを行っています。

きめ細かな積み重ねを続けてきたことで、「今はここで遊ばせたい、と言って入ってくださる方が増えているように思います」と、塚越さんは言います。

「先日、支援センター（後述）に遊びに来ていた保護者の方からうかがったのですが、小学生が集まる教室で中心になって遊んでいる子が全員、さくら幼稚園の卒園児だった、と。自主的に行動できる子になってほしいから、

ここに入園させたいんです、とおっしゃっていました。そういう話を聞くと、やっぱりうれしいですね」（塚越さん）

園を中心にして、周辺に「こどもむら」をつくった

「栗橋さくら幼稚園」は、2015年に認定こども園に移行し、正式名称は「認定こども園こどもむら　栗橋さくら幼稚園」といいます。その名のとおり、栗橋さくら幼稚園を中心にして、法人の関連施設がいくつもあり、さながら小さなむらのようになっています。

「僕が園に入ったときは、まだ栗橋町という自治体で、久喜市とも合併していなくて、ものすごく子どもが少なかったんです。

人口が減ると、街って社会的インフラがどんどんなくなっていくんですよね。駅前にあった、銀行やスーパー、コンビニがなくなっていき、3校あった小学校も1校に統廃合されて、街がどんどん終わっていく感じでした。

それを見てきたので、街に子どもが居続けるようにしなければ、どんなに良い保育をしていても意味がないんじゃないかな、と思ったんです。

街に子どもが居続けるには、産み育てやすい街にしていかないといけない。それで、0～2歳までの子の居場所がなかったので子育て支援センターをつくったり、街に公園がなかったので『あそびの森』というちょっとした公園みたいなものをつくったり。

お母さんたちがお茶できるところがないよねってカフェをつくったり、産前・産後のケアをできるような『マタニティハウス・ベビーハウス』をつくったり。

卒園児たちの居場所も必要だというので、学童クラブをつくったり、駅前に寺子屋みたいな『宿題カフェ』もつくりました」（柿沼さん）

園を中心にして「こどもむら」ができたことが功を奏したのか、市全体の人口が減少していく中、ここの伊坂地

↑「こどもむら学童クラブ en-college」の外観。右奥にある黒い屋根の建物は「駄菓子屋むすび堂」で、小学生たちの放課後の居場所としての役割を果たしている。

→「こどもむら」には、栗橋さくら幼稚園のほかにも、幼保連携型認定こども園がもう1園、0～2歳までの小規模保育園が2園、学園職員のための企業主導型保育園が1園と、いくつもの保育施設を擁している。

→「駄菓子屋むすび堂」は、放課後の時間になるとオープンする。

↑子育て支援センター「森のひろば」の内観。登録すれば、平日は毎日自由に利用できる。

マタニティハウス「にじいろのおうち」の内観。一軒家を使って、おうちのような温かな雰囲気の中、沐浴の練習やおむつ交換の仕方など、育児の予行演習ができる。

→森のひろば内にある「森の図書館」。絵本や児童書のほか、子育ての本や女性誌などもそろえて、保護者がちょっとくつろげるようなスペースになっている。

区の人口は増加しています。

「この先、全国的に0歳の利用が減って、待機児童問題がピークアウトしたら、確実に施設のほうが余っていきます。そのときに保育業界は、働いている人たちの雇用を守るという視点が抜け落ちているんじゃないか、と危惧しています。良い保育をしていれば、それだけで雇用を守れるわけではないですから。

先生たちの労働環境を守ることが、良い保育や魅力的な園につながると思うし、そうじゃないと子どもたちも来続けてくれない、と思うんですよね」（柿沼さん）

保育者が安心して働き続けられることと、子どもたちにとっての質の高い保育を維持することは相互に関わり合って実現するもの。質の高い保育と保育者の労働環境を両輪にすえて、これからの保育を考えていく必要がありそうです。